

妖花

杉本章子

新人物往来社



妖花

杉本章子

新人物往来社

〈著者略歴〉

杉本章子（すぎもと・あきこ）

昭和28年5月28日福岡生まれ。ノートルダム清心女子大学国文科卒業、金城学院大学大学院修士課程修了。昭和54年、「男の軌跡」で第4回歴史文学賞佳作入賞。平成元年、「東京新大橋雨中国」で第100回直木賞受賞。主な著書に『写楽まぼろし』、『名主の裔』などがある。

妖
花

一九九〇年四月二五日 第一刷発行

著 者 杉本章子

発行者 菅 英志

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三三三（新東京ビルディング）〒一〇〇
電話東京（二二三）三九三一（代表） 振替東京六一一五二六四三

印刷所 大日本印刷

製本所 小高製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

目次						
妖花	五					
朱唇	八七					
藤の蔓	二五					
出陣	一四一					
疑惑	一七五					
げんまん	二〇三					

装幀／蓬田やすひろ

妖

花

妖

花

お職女郎の盛紫が、大階段を独り占めしてゆつくりと降りてくる。湯殿を出て、二階の自室に戻ろうと階段口まできた宮内は、その場に足を止めて盛紫を待った。

幅一間もある階段だから難なく上がるものの、そんなことでもしようものなら、不作法な奴だね、と睨めつけられるのが落ちだった。色白の細面に憂いを宿し、見るからに優姿の盛紫だが、どうしてどうして、お職を張るだけあつてめつぼう氣が強い。

白地に銀糸で観世水を縫い取った小袖をまとった盛紫は、宮内にいちべつも与えず、玄関口へ向かった。去年の秋に、横浜高島町の神風楼からここ吉原の揚屋町にある大見世品川楼へ鞍替え

してきて、三枚目と四枚目のあいだを行ったり来たりしている宮内など、齒牙にもかけていないようだ。

廓独特の作りで、大階段は玄関口に背を向けている。だが蹴込みがないので、踏み板と踏み板のすきまから、玄関口の様子が手に取るように見えた。玄関口には、白リンネルの洋傘を手にした盛紫づきの新造がひかえていた。

今日は、八朔はつきである。御一新前は八朔しる白無垢むくといつて、仲の町を道中する花魁おいらんたちは揃って白無垢の小袖を着たものだ。しかし江戸が東京と改められて十三年経った今年の八朔は、楼主ろうしゅらの話し合いで一風変わった趣向となった。今日から三日の間、各楼のお職女郎が揃いの洋傘をさして、午後の四時に待合いの辻へ集まり、見返り柳まで道中するのである。

——ここが神風楼だったら……。

洋傘をさして出ていくのは、このあたしだと宮内は思った。神風楼では、お職を張っていたのである。新造から傘を受け取った盛紫が、見世番の切り火に送られて出て行くのを悔しい思いで見つめていると、後ろからぱんと肩を叩かれた。振り返ると、遣り手のかめが薄笑いを浮かべている。

「いま、ご内所から出てきたらさ」

そろそろ五十に手が届く瘦せじしのかめは、大階段横手の楼主の部屋をあごでしゃくった。

「おまえさんが悔しそうな顔をして、玄関口を睨んでるもんだから、なにごとだろうと、そつときてみたんだよ」

「……」

「盛紫花魁がねたましいんだろ。ま、無理もないさね。おまえさんだつて、神風楼じゃお職を張つてたそうだから」

「……」

「けどね。それならそれで、もうちつと気を締めて客をあしらうこつたよ。吉原とハマじゃどだい格も違やあ客筋も違うんだからさ」

言うだけ言うと、かめは玄関脇の帳場へ姿を消した。

事実かめの言うとおりで、返す言葉もなかった。宮内は唇をかむと、大階段の踏み板を鳴らして上がつて行つた。

神風楼といえば、横浜の花街でも屈指の大見世で、構えはこの品川楼よりずっとハイカラである。白ペンキ塗りの二階建て洋館で、玄関の上には三角破風屋根をかぶつた露台が乗っており、外窓はすべて硝子入りだった。三角破風の正面に、金文字でNo.9と浮き彫りされていることか

ら、「ナンバーナイン」とも呼ばれていた神風楼を、宮内はなつかしく思い出していた。

そこへいくと品川楼は三階建てではあるが洋館風にすぎず、玄関には昔ながらの唐破風が乗り、障子なども硝子の入った新式ではないから屋内は小暗い。この大階段のこしらえひとつを見てもわかるように、一体に旧套きゅうそうを踏まえた造りだった。

しかし、そこがいうところの格なのである。これには、新興だけに神風楼などの及ぶところではなかった。宮内も、吉原の大見世がもつ格に惹かれたからこそ、神風楼のお職の座を捨てて鞍替えしてきたのだった。

——だけど……。

こんなはずじゃなかったよ、と宮内は苦笑をもらす。天下の吉原の大見世で、神風楼と同じに短日月でお職が張れるとは考えていなかった。だが、二枚目ぐらいはすぐ張れようと踏んで、鞍替えを思い立ったのだった。

むろん神風楼の楼主は口を極めて引き止めたのだが、宮内は吉原の大見世稲本楼の小稲なちに倣なまって我意を押し通したのである。娼妓解放令の洗礼を受けた小稲は、この御一新の世では女郎にだって自由があります、と胸のすくような啖呵たんかを切つて、これまた大見世の角海老楼に鞍替えした。

明治九年、ちょうど宮内が神風楼に身売りした年のことである。

この話はすぐに横浜の花街へも伝わり、女郎衆の心の支えとして語りつがれていた。宮内が鞍替えを言い出したころ、津々浦々で自由民権運動が澎湃ほうはいとして起きてきたこともあって、楼主のほうも折れざるを得なくなり、鞍替えできたのである。

小稲へのあこがれで、宮内は角海老楼への鞍替えを望んだのだが、金銭のことで楼主同士の話がつかず、この品川楼に落ち着いた。品川楼も、いまでは五軒しかない大見世のひとつだから、べつに不満があるわけではないが、しかしどうも吉原の水が合わないような気がする。

——甘かったかねえ。

湯あみしてさっぱりしたのもつかのま、また汗がにじんできた頸筋くびすじに手ぬぐいをあてながら、宮内は二階に上がった。上がってすぐ左手の遣り手部屋は、障子があけはなたれていて、もうひとりの遣り手のたつが立て膝で煙管きせるの雁首たばこに真をつめていた。

たつはかめと同年輩だが、こちらは小ぶとりで、宮内の死んだ祖母とどこなく似ていた。祖母はひとり息子、つまり宮内の父親の放蕩を嘆きながら五年前に世を去った。

本所元町で袋物問屋を営んでいた宮内の家は、祖母が亡くなると一年も経たずして、すっかり身代を傾けてしまった。父親が、柳橋の小新という芸者に入れ揚げたからである。そうなると金の切れ目が縁の切れ目のたとえおり、小新は父親など見向きもしなくなった。

父親はすさんだ明け暮れのなか、ついに寝こんでしまう。二重三重の抵当に入った店には、くる日もくる日も借金取りが押しかける。母親と、そのころ田鶴といった宮内、それに九つの弟ではどうすることもできなかった。とうとう田鶴が身売りをする羽目になったのだ。

二百五十円という前借で横浜の神風楼に身を沈めてまもなく、宮内のもとへ父の死を報せる母からの手紙が届いた。売られてきてこっち泣き暮れるばかりで、遣り手に折檻されどおしだった宮内の涙が、その手紙でようやく止まった。妻子をかえりみずに妓に狂い、家を傾けたあげくに命をちぢめた愚かな父親である。

——よし。今日からは……。

このあたしが、小新になろう。夜ごと廓に通ってくる父親のような遊治郎どもを狂わせて稼ぎまくり、一日も早く足を抜いて、母と弟のもとへ戻るのだ。宮内はこの日からすすんで、遣り手や朋輩から女郎の手練手管を教わった。父親の死をきっかけに、宮内は女郎としての性根が据わったのだった。

それから半年が経って、はやくも二枚目を張るようになった宮内のもとへ、今度は保証人から手紙がきた。母と弟が、夜逃げをしたというのである。

——いったい、あたしは……。

なんのために身を売ったのだろう。宮内は煮え返る思いで、保証人からの手紙を引き裂いた。

あたしを廊に叩き売っておきながら、ふたりに夜逃げするとはあんまりだ。手紙には、借金でいかなともし難くなった店を女手ひとつで立て直すのは、初手から無理だったのだと書いてあった。そんなら、あたしが身を売るまえに、一家で夜逃げすればよかったじゃないか。

——あんまりだよ、おつかさん。

あたしを見殺しにして……。宮内は、頸に吊した肌守りの銀鎖を震える手で引きちぎった。神風楼へ売られてくる日に、母がくれたものである。もう、頼れるのは自分だけ——宮内はいつもの勤めに励むようになった。以来、母と弟の行方は杳として知れないままである。

「なんだい、あたしの顔になにかついてんのかい」

たつが尖った声を出した。声柄は、祖母とは似ても似つかない。田鶴や、と呼んだ祖母の声はまるく、やさしかった。

「い、いえ」

たつの姿に祖母の面影を見て、思わず足取りをゆるめていた宮内は、慌てて頭をさげると自室へ向かった。

宮内のあてがわれている部屋は、右へ鉤かぎの手に曲がった廊下の角からふた部屋めである。宮内

と書かれた黒塗りの木札のかかった部屋に戻ると、物音を聞きつけたとみえて、右隣の部屋から小式部がやってきた。

「ずいぶんと、お磨きだったね」

「まあね」

濡れた手ぬぐいを手ぬぐい掛けに広げてから、宮内は簞笥たんすの上の鏡台をおろして身じまいにかかった。

「ついさつき、盛紫さんが道中に出てったよ。廊下で顔を合わせたんだ」

お職の部屋は、ここより三部屋奥の、中庭を見おろすところにあつて、広々としている。宮内や小式部のような八畳ひと間の「部屋持ち」と違い、お職は「座敷持ち」とも呼ばれて、八畳の自室のほかに十二畳の座敷を与えられているのだ。

「観世水模様の白小袖が、なんともよく映えていた」

「そうかい」

知ってるよ、と言うのはなぜかしやくだった。宮内はそれだけ言うと、小町水こまちずいを掌につけて、顔を叩きはじめた。

「目ん玉が飛び出るほど高価たかかつたろうよ」